

THE WORLD FILMeX

映画を見れば世界がわかる

Vol.7

蔵原惟繕監督特集～狂熱の季節～
東京フィルメックス特集上映



写真は『狂熱の季節』(1960年) ©1960 NIKKATSU Corporation. All rights reserved.

本文中で触れた日本映画の旧作特集では、国際交流基金のプリント協力も得て、これまでに清水宏、内田吐夢、中川信夫、岡本喜八、山本薩夫を取り上げてきた。これらの作品群が、ベルリン、香港、ロッテルダム、サンパウロなどの国際映画祭や、カナダ、米国、英国、スペインのシネマテークなどで巡回上映されている。

『蔵原惟繕監督特集～狂熱の季節』は、11月22日から30日まで東京国立近代美術館フィルムセンター大ホールで開催(24日は休館)。期間中には、ゲストを迎えるトークイベントも予定されている。詳細は東京フィルメックス公式サイトで。
<http://www.filmex.net>

蔵原惟繕の名前と『南極物語』の記録的な大ヒットは分かれがたく結びついている。しかし、彼の映画作家としての個性は、初期から中期にかけての作品にこそ色濃く現われている。

1957年に石原裕次郎主演の『俺は待つてゐるぜ』で監督デビュー。ヌーヴェル・ヴァーグのように手持ちカメラを多用したダイナミックな画面作りは、映像への独自の美意識とあいまって技巧派としての評価を得ている。

さらに蔵原惟繕を語る上で欠かせないのが、繰り返される『脱出』のテーマだ。物語の登場人物はみな、いまの自分に居心地の悪さを感じ、現在の状況から飛び出さうともがいている。

『脱出』は物語にだけでなく、視覚的にも分かりやすく登場する。人物を見下ろす俯瞰ショットは、全てから解き放たれた大空を飛ぶ鳥の視点だ。また、港町や船、道、飛行機などの、外の世界へとつながる要素も頻りに登場する。

『黒い太陽』では、追いつめられた黒人脱走兵が母国へ戻りたい一心でアドバルーンに我が身をくくりつけて大空へと舞い上がる。

『南極物語』という偉大な記念碑の陰に隠れてしまった傑作には、「ここからどこかへ」飛び立とうとする登場人物たちの爆発寸前まで凝縮されたエネルギーがみなぎっている。そしていま、世界へと旅立とうとしているフィルムを目の前にして、狂熱の季節を私たちは迎えるようとしている。

数々の作品を撮り、音楽ではヴァンゲリスやニノ・ロータを起用、さらに『黒い太陽』ではマックス・ローチ・グループを日本に招聘して録音するなど、スタッフにも国際的な血を取り入れた。これもポルネオ生まれ、神戸育ちの蔵原が持つ特性だったと言える。

今回、蔵原惟繕のエッセンスが詰まった初期から中期にかけての12本に光をあて、東京国立近代美術館フィルムセンターと東京フィルメックスとの共催で全ての作品に英語字幕が付けられ、特集上映が開催される。過去にも両者の共催により日本映画の旧作が英語字幕付きで特集され、その後海外での上映へと展開してきた。今回の蔵原特集も世界へと届けることを願って止まない。そして、その兆しは見えている。

大増ページ
年末特大号

AP Images

SAPIO 国際情報誌
INTERNATIONAL INTELLIGENCE MAGAZINE

THE NEXT ISSUE 次号予告

SIMULATION REPORT 土建屋政治、脱アメリカ——自民党、小沢一郎は何を受け継いだのか

田中角栄は生きている

SPECIAL REPORT 「CDS 5000兆円クラッシュ」、国内では地方崩壊

本当の危機はこれから始まる 金融テロとの戦い

次号12月17日号は11月26日(第4水曜日)発売、特別定価480円です。